

中高生の生成 AI 利用実態と発達段階に応じた指導の重要性について

平田義隆^{*1}

Email: hiratay@kyoto-wu.ac.jp

*1: 京都女子中学校高等学校教諭・京都女子大学講師

京都教育大学大学院 教職実践研究科 学校臨床力高度化系 中核教員・リーダー教員養成コース

◎Key Words 生成 AI, 対話的存在, AI リテラシー

1. はじめに

近年、生成 AI は急速に普及し、教育現場においてもその活用可能性が議論されるようになってきている。特に ChatGPT の登場以降、生成 AI は単なる情報検索ツールにとどまらず、文章作成、翻訳、学習支援、アイデア生成など、多様な用途で利用されるようになった。また、UNESCO は 2023 年に「教育・研究における生成 AI に関するグローバルガイダンス」を公表し、教育分野における生成 AI 利用の在り方について各国に提言を行っている。一方、学校現場では、生成 AI の活用方法や指導方針について検討が進められているものの、生徒側ではすでに学校外で日常的な利用が進んでいる実態がある。特にスマートフォンを中心とした利用環境においては、学校が直接的に利用を制御することは難しく、実際の利用状況を踏まえた指導の必要性が高まっている。これまでの生成 AI に関する教育研究では、授業実践や学習支援ツールとしての活用可能性に焦点が当てられることが多かった。しかし、生徒が生成 AI をどのような存在として捉え、どのような関係性の中で利用しているのかについては、十分に明らかになっていないと言え難い。特に、学習支援に加え、「相談しやすい」、「安心する」、「何度でも聞ける」といった対話的・心理的側面を伴う利用については、今後の教育を考える上で重要な視点になると考えられる。そこで本研究では、中学 1 年生から高校 2 年生までを対象に実施した生成 AI 利用調査をもとに、中高生における生成 AI 利用の実態を明らかにするとともに、生徒が生成 AI をどのような存在として受け入れているのかについて考察することを目的とする。

2. 調査の概要

本調査は、中高生における生成 AI 利用の実態と意識を把握することを目的として実施した。調査対象は、中高一貫女子校に在籍する中学 1 年生から高校 2 年生までの生徒であり、Google フォームを用いてアンケート調査を実施した。調査期間は 2026 年 3 月 9 日から 3 月 31 日までの 23 日間である。調査内容は、「生成 AI の認知状況」、「利用頻度」、「利用目的」、「利用経験」、「リスク認識」、「家庭や周囲の環境」に関する選択式の質問に加え、「生成 AI に対する印象や利用経験」に関する自由記述を含む構成とした。

本研究では単純集計に加え、自由記述の内容についても分類整理を行い、中高生が生成 AI をどのような存在として受け入れているのかについて検討を行った。

3. 調査結果

3.1 結果の概要

本調査には、中学 1 年生から高校 2 年生までの計 816 名から回答が得られた。回答率は全体で 61.7%であり、学年間で差は見られるものの、多くの生徒から回答を得ることができた。家庭で利用できる端末については、「スマートフォン」と答えた生徒が最も高く、全体の 97.4%が所持しており、日常的にスマートフォンを中心とした利用環境が整っていることがうかがえる。したがって、生成 AI の利用は学校管理下の端末だけではなく、生徒個人の端末を通して日常的に行われていると考えられる。1 日のインターネット利用時間については、「2~3 時間」が最も多く、全体の 32.0%、「1~2 時間」が 25.7%であった。一方で、「4 時間以上」と回答した生徒も 19.7%存在しており、インターネット利用そのものが既に生活の一部となっている実態が確認された(表 1)。さらに、「自分の生成 AI アカウントを持っているか」という設問では、全体の 64.3%が「持っている」と回答した(表 2)。つまり、生成 AI は一部の限られた生徒のみが利用している段階ではなく、多くの生徒が実際にアクセス可能な状況にある

表 1 インターネット利用時間

	1時間 以内	1時間 ~2時間	2時間 ~3時間	3時間 ~4時間	4時間 以上
全体	7.2%	25.7%	32.0%	15.3%	19.7%
中1	9.4%	42.8%	27.5%	7.2%	13.0%
中2	7.1%	23.6%	38.5%	13.2%	17.6%
中3	6.3%	30.4%	26.8%	18.8%	17.9%
高1	3.1%	19.2%	31.0%	23.1%	23.6%
高2	12.3%	19.4%	33.5%	11.0%	23.9%

表 2 生成 AI アカウントの所持について

	持っている	持っていない
全体	64.3%	35.7%
中1	65.2%	34.8%
中2	60.4%	39.6%
中3	67.0%	33.0%
高1	66.8%	33.2%
高2	62.6%	37.4%

表 3 生成 AI を使い始めた時期

	まだ	3ヶ月前	半年前	1年前	1~2年前	2年以上前
全体	3.9%	17.8%	30.3%	44.1%	13.1%	3.9%
中1	5.8%	24.6%	28.3%	37.7%	9.4%	3.6%
中2	4.9%	21.4%	33.0%	36.8%	10.4%	3.8%
中3	1.8%	11.6%	32.1%	48.2%	20.5%	6.3%
高1	3.1%	14.4%	25.3%	53.3%	14.0%	3.9%
高2	3.9%	16.8%	34.8%	41.9%	12.9%	2.6%

ことが分かる。そして、「初めて生成AIを利用した時期」については、「この1年以内」と回答した生徒が最も多く、全体の44.1%を占めていた（表3）。これらの結果から、中高生における生成AI利用は、既に特別なものではなく、日常的にアクセス可能な環境の中で急速に定着しつつあることが示唆された。

3.2 結果の特徴

続いて、この調査の結果の特徴について述べていきたい。まず、生成AIの認知状況について見ると、「ChatGPTを知っている」と回答した生徒は全体として非常に多く、中学3年生以上ではほぼ全員が認知している結果となった。また、「生成AIという言葉を知っているか」という設問についても、多くの生徒が認知しており、生成AIそのものが既に一般的な存在になりつつあることが確認された。また先述の通り、自分のアカウントを持っている生徒は6割以上であることも加えると、生成AIは一部の生徒のみが利用する特殊なツールではなく、多くの生徒にとって実際に利用可能な環境にあることが分かる。また、利用頻度を問う設問では、「週に何回か使う」と回答した生徒が最も多く、「毎日使う」と回答した層も一定数存在した。つまり、生成AIはまだ完全に常時利用の段階にまでは至っていないものの、「必要なときに使うツール」として既に生活の一部になり始めていると考えられる。その上、利用環境について、主として個人端末を通して生成AIの利用が行われている実態が確認されており、学校管理

下の端末ではなく、学校外での生成AI利用の実態が確認された。

次に、学習支援ツールとしての利用についてである（表4）。生成AIの利用目的についての設問では、「英語の翻訳」、「数学の解き方説明」、「文章の要約」、「調べ学習の手助け」など、学習に関連する利用が多く見られた。特に、「数学の解き方説明」や「英語の翻訳」に関する利用割合は高く、生成AIが学習支援ツールとして既に定着し始めていることが分かる。また、自由記述においても、「分からない問題をすぐに教えてくれる」、「先生よりも分かりやすいことがある」、「理解できるまで何度でも聞ける」といった記述が複数見られた。これらの記述から、生徒は生成AIを単なる検索ツールとしてではなく、「対話しながら学習を支援してくれる存在」として利用していることがうかがえる。さらに「時間短縮になる」、「要約してくれる」、「レポート作成を助けてくれる」といった記述も多く、効率化ツールとしての利用も進んでいることが確認された。特に高校段階では、学習課題への実用的利用が進み、生成AIを「必要に応じて使い分けるツール」として利用している様子も見られた一方で、「AIの回答をそのまま提出したことがある」という回答も少数ながら存在していた。また、「必ずしも正しいとは限らない」、「もっともらしい嘘をつく」といった認識を持ちながらも利用している生徒が多いことから、生徒たちは生成AIの危険性を一定理解しつつも、利便性を優先して利用している実態も見られた。

表4 生成AIの利用目的（複数回答可）

	宿題のヒント	作文・レポート	要約	英語の翻訳
全体	37.4%	19.5%	19.5%	31.7%
中1	25.4%	17.4%	22.5%	26.1%
中2	34.6%	19.8%	15.9%	27.5%
中3	43.8%	24.1%	19.6%	27.7%
高1	39.3%	11.4%	16.2%	35.8%
高2	43.9%	29.7%	25.8%	38.7%

	数学の解き方	調べ学習	プログラミング	プレゼン
全体	45.6%	40.0%	2.9%	16.2%
中1	28.3%	35.5%	2.2%	13.0%
中2	33.0%	41.8%	0.5%	22.5%
中3	46.4%	41.1%	0.0%	25.9%
高1	58.1%	34.9%	7.9%	11.4%
高2	56.8%	48.4%	1.3%	11.6%

	壁打ち	話し相手	悩み相談	イラスト
全体	23.3%	35.5%	39.5%	16.9%
中1	22.5%	34.1%	32.6%	25.4%
中2	21.4%	29.7%	31.9%	16.5%
中3	24.1%	34.8%	34.8%	18.8%
高1	20.5%	41.0%	47.2%	10.9%
高2	29.7%	36.1%	46.5%	17.4%

	小説・物語	使ったことなし	その他
全体	9.1%	3.1%	9.3%
中1	13.8%	2.2%	18.1%
中2	8.2%	3.8%	11.5%
中3	9.8%	1.8%	7.1%
高1	5.2%	3.1%	5.7%
高2	11.0%	3.9%	5.8%

表5 生成AIとの対話的・心理的關係に関する回答

	AIと話すとき 安心する	人よりAIの方が 相談しやすい	誰にも言えないことを AIに言ったことがある	AIに 励まされた と感じた ことがある
全体	14.0%	27.1%	25.1%	26.8%
中1	13.0%	22.5%	23.2%	24.6%
中2	14.3%	22.5%	21.4%	21.4%
中3	9.8%	24.1%	23.2%	27.7%
高1	15.7%	33.2%	24.5%	29.7%
高2	14.8%	29.7%	33.5%	30.3%

	AIと 話すぎた と感じた ことがある	AIは自分を 否定しない と感じる	AIがあると 勉強への不 安が減る	AIがあると 考えなくな るを感じる
全体	16.4%	32.6%	16.4%	32.5%
中1	10.9%	37.0%	11.6%	24.6%
中2	13.2%	21.4%	9.3%	23.1%
中3	14.3%	35.7%	17.9%	44.6%
高1	17.0%	31.4%	21.4%	34.5%
高2	25.8%	41.3%	20.6%	38.7%

	AIを使うと 理解が 深まる	AIを使うと 成績が 上がると 思う
全体	35.2%	11.0%
中1	27.5%	7.2%
中2	32.4%	5.5%
中3	30.4%	14.3%
高1	39.3%	15.3%
高2	42.6%	12.3%

最後に、対話的・心理的利用についてである（表 5）。今回の調査で特に特徴的であったのは、生成 AI が学習支援だけでなく、対話的・心理的側面を伴って利用されている点である。生成 AI の利用目的についての設問では、「話し相手」や「悩み相談」を選択した生徒も一定数存在している。また、AI の使用感触についての設問では、「AI と話す」と安心する、「人より AI の方が相談しやすい」、「誰にも言えないことを AI に言ったことがある」といった項目に対して肯定的回答を示す生徒も見られた。さらに自由記述では、「否定せずに話を聞いてくれる」、「何回聞いても嫌な顔をしない」、「人に言えないことも相談できる」、「気を遣わなくてよい」といった記述が複数確認された。また、生成 AI の良くない点として、「全部肯定してくる」、「否定しないので逆に危険」、「自分が正しいと思い込んでしまう」といった回答も見られた。このことは、生徒自身も生成 AI との関係性について一定の危うさを感じていることを示している。加えて、「AI のリスクについて」の設問では、「特に心配していない」と回答した生徒が約 8 割に達していた。一方で、自由記述では「嘘をつく」、「もっともらしい間違いがある」、「依存してしまう」といった回答も多く見られた。つまり、生徒たちは生成 AI の危険性について知識としては理解しているものの、それを自分自身の問題としては十分実感できていない可能性を示している。

【自由記述例】

- ・「何回聞いても嫌な顔をしない」
- ・「人に言えないことも相談できる」
- ・「否定せずに話を聞いてくれる」
- ・「気を遣わなくてよい」
- ・「先生よりもわかりやすい」
- ・「理解できるまで聞ける」
- ・「気持ちが楽になった」
- ・「全部肯定してくるので逆に危険」
- ・「もっともらしい嘘をつく」
- ・「自分が正しいと思い込んでしまう」
- ・「AI の方が気軽に聞ける」
- ・「怒られないから質問しやすい」

4. 考察

ここでは、以上の結果に基づき考察を行いたい。そこで筆者が考えるものとして次の二点を挙げる。

一点目は、「生成 AI の対話的存在化」についてである。先述の通り、中高生における生成 AI 利用は、単なる情報検索や学習補助を超えた段階へ進みつつあることが示唆された。従来の ICT 機器やインターネット検索は、主として「情報を取得するための道具」として利用されてきた。しかし、本調査では、「話し相手」、「悩み相談」といった利用目的に加え、「AI と話す」と安心する、「人より AI の方が相談しやすい」といった回答も一定数見られた。また、自由記述においても、「否定せずに聞いてくれる」、「何度でも聞ける」、「気を遣わなくてよい」といった記述が複数確認された。これらの結果から、生徒たちは生成 AI を単なるツールとしてではなく、「対話できる存在」として受け入れ始めている可能性が考えられる。特に、生成 AI は

感情的反応を示さず、否定や拒否を行わないため、生徒にとって心理的負担の少ない相談相手として機能している側面があると考えられる。その一方で、自由記述では「全部肯定してくるので危険」、「自分が正しいと思い込んでしまう」といった記述も見られた。このことは、生徒自身も生成 AI との関係性に一定の危うさを感じていることを示している。つまり、生徒たちは生成 AI に安心感や利便性を感じながらも、その影響については十分整理し切れていない状況にあるのではないだろうか。以上のことから、生成 AI は従来の ICT 機器とは異なり、「認知的支援」だけでなく、「対話的・心理的支援」にも関与し始めている存在として、当たり前になってきていると考えられる。特に中高生段階は、対人関係への不安や他者評価への敏感さが高まりやすい時期でもある。そのような中で、否定や拒否を行わず、繰り返し対話可能な生成 AI は、生徒にとって心理的負担の少ない存在として受け入れられやすい可能性が考えられる。従来の ICT 機器やインターネット検索が「情報取得」を中心としていたのに対し、生成 AI は「対話」を通して利用される点に特徴があることに加え、生徒が感情的安心感や相談相手としての役割を見出している点は、従来の情報機器とは異なる側面であると考えられる。

二点目は、「生成 AI 時代の学校教育のあり方」についてである（表 6）。今回の調査から、生成 AI の利用について、学校が「使わせるか、禁止するか」を検討する段階は、既に過ぎつつあることが示された。特に、スマートフォンを中心とした個人端末環境の中で、多くの生徒が既に生成 AI を利用しており、その利用は学校管理下ではなく、学校外の日常生活の中で進行している。さらに、すべての学年で一定割合の生徒が自分の生成 AI アカウントを所有していたことから、生成 AI 利用は既に一部生徒だけの特殊な行動ではなくなっていると考えられる。一方で、生徒たちは生成 AI を積極的に利用しながらも、「どこまで使ってよいか分からない」、「学校で AI をどのように扱えばよいか迷う」といった回答も示している。また、「学校で AI の使い方を正式に教えてほしい」とする回答も一

表 6 生成 AI 利用に対する不安・学校への期待

	AI なしで勉強するのは不安	AI を使っていることを先生に言うのがにくい	学校で AI を使ってよいか分からない	テストで AI を使うのはよくないと思う
全体	8.0%	12.7%	19.1%	42.9%
中1	2.9%	13.0%	27.5%	51.4%
中2	1.1%	6.6%	16.5%	37.9%
中3	5.4%	12.5%	17.0%	50.0%
高1	14.8%	11.4%	15.3%	38.9%
高2	12.3%	21.9%	21.9%	41.9%

	宿題で AI を使うのは問題ないと思う	どこまで AI を使ってよいか迷うことがある	AI を正しく使うためにルールが必要だと思う	学校で AI の使い方を正式に教えてほしいと思っている
全体	19.2%	43.9%	46.4%	20.2%
中1	21.0%	50.0%	60.9%	28.3%
中2	10.4%	48.4%	47.3%	25.3%
中3	24.1%	34.8%	49.1%	19.6%
高1	16.6%	38.9%	39.7%	12.2%
高2	28.4%	47.1%	40.6%	19.4%

定数存在している。これは、生徒自身も生成 AI との適切な距離感や利用基準を模索している状況にあることを示している。このことから、今後の学校教育においては、単純な禁止や制限を中心とした対応ではなく、生成 AI 利用を前提とした指導へ転換していく必要があると考えられる。特に重要なのは、「使う、使わない」を判断することではなく、「どのように使うか」を考えさせることである。また、生成 AI は学習支援だけでなく、相談や対話など心理的側面にも関与し始めていることから、従来の情報モラル教育だけでは十分ではない可能性もある。今後は、AI リテラシーに加え、「生成 AI との適切な距離感」や「AI との関係性を主体的に考える力」を育成する視点も必要になると考えられる。

5. 今後の課題

本研究では、中高生における生成 AI 利用の実態について、特に対話的・心理的利用の側面に注目して分析を行った。しかし、本調査は単純集計および自由記述分析を中心としたものであり、どのような生徒が生成 AI に対して強い心理的依存傾向を示すのか、あるいは学習利用と対話的利用との関連性についてまでは十分に明らかにすることはできていない。また、本研究では中学 1 年生から高校 2 年生までを対象としたが、学年による利用傾向の変化についても、さらに詳細な分析が必要であると考えられる。特に、生成 AI を「学習支援ツール」として利用する段階から、「対話的存在」として利用する段階への変化については、今後の重要な研究課題となると考える。さらに、本調査は女子校に在籍する生徒を対象として実施したものであり、回答者が女子生徒に限定されている点にも留意する必要がある。特に、本研究で特徴的であった「悩み相談」や「対話的利用」に関する傾向については、男女によって利用傾向や生成 AI との関わり方に違いが生じる可能性も考えられる。そのため、今後は男女共学校や男子校を含めた比較検討も必要になると考えられる。加えて、生成 AI を取り巻く環境は現在も急速に変化しており、生徒の利用実態や認識も短期間で大きく変化する可能性が高い。そのため、今後も継続的な調査を行い、中高生と生成 AI との関係性がどのように変化していくのかを追跡していく必要がある。

6. おわりに

本研究では、中高生を対象とした生成 AI 利用調査を通して、生徒たちが生成 AI をどのように利用し、どのような存在として受け入れているのかについて検討を行った。その結果、生成 AI は学習支援ツールとして利用されているだけでなく、「相談しやすい」、「安心する」、「何度でも聞ける」といった対話的・心理的側面を伴いながら利用されている実態が確認された。これは、生成 AI が単なる情報取得手段を超え、中高生にとって「対話的存在」として受け入れられ始めていることを示している。また、生成 AI 利用は既に学校外の日常生活の中へ浸透しており、学校教育においても、その存在を前提とした対応が求められる段階に入っていると考えられる。今後は、「生成 AI を使うか、使わないか」を議論するのではなく、「生成 AI とどのような距離感で関わり、どのように活用していくの

か」を考える教育へ転換していく必要がある。

本研究で明らかになったのは、生成 AI が中高生にとって単なる学習支援ツールではなく、対話や相談を行う相手としても受け入れられ始めているという実態である。今後、生成 AI の性能向上と普及がさらに進む中で、生徒と生成 AI との関係性も大きく変化していくことが予想される。学校教育には、そうした変化を適切に捉えながら、生徒が生成 AI を主体的かつ適切に活用できるよう支援していくことが求められる。

参考文献

- (1) UNESCO (2023) Guidance for generative AI in education and research. UNESCO Publishing.
- (2) 文部科学省 (2024) 『初等中等教育段階における生成 AI の利活用に関するガイドライン (Ver.2.0)』
- (3) 中央教育審議会 (2021) 『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して (答申)』